

# 琉球大学学術リポジトリ

## 保育者養成校に通う学生の絵本知識の測定 ~学年による違いに着目して~

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学教職センター 公開日: 2024-04-16 キーワード (Ja): 絵本, 幼稚園教育要領, 読書習慣, 蔵書量 キーワード (En): 作成者: 宮城, 利佳子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002020270">https://doi.org/10.24564/0002020270</a>

## 保育者養成校に通う学生の絵本知識の測定

～学年による違いに着目して～

宮城 利佳子

### Measurement of Picture Book Knowledge Among Students Attending Child Care Training Schools : A Focus on Differences by Grade

MIYAGI Rikako

キーワード 絵本、幼稚園教育要領、読書習慣、蔵書量

#### 1. 問題と目的

##### 1.1 保育における絵本

保育では、活動の導入時や生活の区切りとなるおあつまりの時等、様々な場面で絵本が活用される。園における集団への読み聞かせは、聞き手のその場の楽しさだけでなく、共通の知識として、集団の遊びへも影響すると考えられる。

##### 1.2 幼稚園教育要領解説における絵本の位置づけ

幼稚園教育要領解説(文部科学省 2018)の中でも、絵本について繰り返し言及されている。以下に、幼稚園教育要領内での位置づけを確認する。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」では2つの姿で絵本についての記載がある。

まず、「(5) 社会生活との関わり」において、解説の中で「教師は幼児の関心に応じて、絵本や図鑑や写真、新聞やインターネットで検索した情報、地域の掲示板から得られた情報などを、遊びに取り入れやすいように見やすく保育室に設定するなどの工夫をし、幼児の情報との出会いをつくっていく。」としており、絵本が、幼児の情報源となることについて言及している。

次に、「(9) 言葉による伝え合い」で、「先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。」とある。つまり、幼児が、豊かな言葉や表現を身に付けるツールとなることについて言及している。

「指導計画の作成上の留意事項」の「(3) 言語活動の充実」「(4) 見通しや振り返りの工夫」の中でも、絵本の活用は言及されている。絵本は言葉に親しむツールとなるだけでなく、活動の区切りにも使われ生活の見通しへもつながる。

領域では、「環境」「言葉」「表現」の三領域で絵本についての記載がある。それぞれの領域について検討する。

領域「環境」では、内容「(10) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ」、内容の取扱い「(5) 数量や文字などに関しては、日常生活の中で幼児自身の必要感に基づく体験を大切にし、数量や文字などに関する興味や関心、感覚が養われるようにすること。」の解説の中で、幼児が文字に触れる環境として絵本についての記載がある。

領域「言葉」では、ねらい「(3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになる」とともに、絵本や

物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。」とあり、内容「(4) 人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。」「(7) 生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。」「(9) 絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。」、内容の取扱い「(2) 幼児が自分の思いを言葉で伝えるとともに、教師や他の幼児などの話を興味をもって注意して聞くことを通して次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること。」「(3) 絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。」「(4) 幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。」の解説の中で、絵本についての記載がある。絵本は幼児が話を聞く機会を作り、楽しい言葉や美しい言葉に出会う機会となる。また、園にいる他者の興味や関心に応じて、自分の興味のあることではないものに出会い、様々な気持ちに触れることとなる。

領域「表現」では、ねらいについての解説の中で、「幼児は音楽を聴いたり、絵本を見たり、つくったり、かいたり、歌ったり、音楽や言葉などに合わせて身体を動かしたり、何かになったつもりになったりなどして、楽しんだりする。」と記載がある。さらに、内容の取扱い「(1) 豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。」の解説の中で、幼児の豊かな感性が磨かれるための環境として、「幼児一人一人の感動を引き出せる自然から、絵本、物語などのような幼児にとって身近な文化財、さらに、心を弾ませたり和ませたりするような絵や音楽がある生活環境」をあげている。

幼稚園教育要領解説の領域「健康」では絵本についての言及がないが、絵本を活用することは保育の中で行われており、絵本を活用した健康教育、安全教育については、むし歯、排便、運動遊びについて等、多くの実践報告や研究がある（斎藤 2022、北川 2022、矢幅・石井・若槻・近藤・崎田 2021 等）。同様に領域「人間関係」でも、絵本を活用した劇づくりを領域「人間関係」の視点から分析する研究がある（藤田 2021、綿引・小口 2020 等）。

つまり、保育の中で、絵本は様々な場面で活用され五領域すべてにかかわる重要な環境の一つである。

### 1.3 本研究の目的とその意義

絵本は保育の中で重要な環境であるが、絵本の扱う主題は様々であり、文章の量や語彙レベルも絵本によって異なる。そこで、保育者は幼児の発達段階やその時の幼児の興味・関心に応じて、絵本を選んでいく必要がある。そのためには、保育者自身がある程度の絵本知識を持つ必要がある。

これまで、絵本知識を測定する研究はいくつかなされてきている。例えば、大竹・奥村・山田小林(2019)は、タイトルと著者を知っているかどうかを基準とする絵本知識測定リストを作成し、タイトルリストについて、養育者と保育者養成校の学生の間には差がなく、大学生よりも高い得点を示したことを明らかにしている。そして、著者リストについては、養育者、保育者養成校の学生、大学生の順に高い得点を示したことを明らかにしている。養育経験の有無や子どもに接する機会の多さが、リスト得点へと影響していると考察がなされているが、学年による違いは検討されておらず、養成校での学習が影響しているかについては検討がなされていない。

そこで、本研究では、大竹ら(2019)の研究を参考に、保育者養成校の学生の絵本知識について、学生の読書量、絵本が好きかどうか、絵本の蔵書数、図書館利用の頻度、絵本を保育実践で活用したいと考えているかという点及び保育者養成校での学習経験の影響について検討する。

## 2. 研究方法

### 2.1 調査対象者

保育者養成専門学校に通う学生(1年生123人と2年生74人)を対象に、1年生は筆者の担当する授業内で実施し、2年生は各クラスの担任の先生が授業内で、2020年2月に実施した。学生は、併修で短期大学にも所属しており、幼稚園教諭免許及び保育士資格を取得予定の学生である。

### 2.2 調査項目

大竹・奥村・山田・小林(2019)の絵本のタイトルリスト(40冊)及び著者リスト(40人)を利用した。読書量、絵本が好きかどうか、絵本を読む頻度、絵本の蔵書数、図書館利用の頻度、絵本を保育実践で活用したいかどうかについての項目を設定した。

### 2.3 倫理的配慮

調査に先立ち、小田原短期大学研究倫理委員会の承認を受けて、調査を実施した。学生には、調査結果を研究に使用すること、調査に参加するかどうかは学生の自由であり、協力しないことによる不利益はないことについて、質問紙に記述した上で、口頭でも説明し、調査の同意を得た。また、調査は無記名で行い、個人の特定ができないようにして実施した。

## 3. 結果と考察

### 3.1 学年による違い

#### 3.1.1 絵本タイトルの知識について

絵本のタイトルを知っているものに丸をつけてもらった。絵本のタイトルリストは、大竹ら(2019)の40冊のリストを使用し、1つ1点として得点をつけた。

学年別に、絵本知識(絵本タイトル得点)について分析した。絵本タイトル得点の平均値は1年生11.4(標準偏差4.26 最小値3、最大値28)、2年生13.8(標準偏差4.51 最小値6、最大値29)、養成校学生全体12.3(標準偏差4.49 最小値3、最大値29)であった(表1参照)。

1年生と2年生の平均点の差が、統計的に有意かどうかを確かめるために、t検定を行ったところ、有意差があった( $t(195) = 3.73$ ,  $p < .001$ )。この結果から、1年生に比べ、2年生は絵本タイトルについての知識を持っていることが明らかになった。

#### 3.1.2 絵本の著者名の知識について

著者名を知っているものに丸をつけてもらった。著者名のリストは、大竹ら(2019)の40人のリストを使用し、1つ1点として得点をつけた。

学年別に、絵本知識(著者名得点)について分析した。著者名得点の平均値は1年生1.5(標準偏差2.27)、2年生2.0(標準偏差2.47)であった(表1参照)。

1年生と2年生の平均点の差が、統計的に優位かどうかを確かめるために、t検定を行ったところ、統計的に有意な差はなかった。この結果から、1年生と2年生に、著者名についての知識の差はないことが明らかになった。

表1 学年別の絵本知識得点

学年	絵本タイトル 平均得点	標準偏差	著者名 平均得点	標準偏差
1年 (n=123)	11.4	4.26	1.5	2.27
2年 (n=74)	13.8	4.51	2.0	2.47
全体 (n=197)	12.3	4.49	1.7	2.36

### 3.1.3 読書量について

本をどれくらい読むかについて、電子書籍、本、絵本に分けて質問した。よく読む、少し読む、あまり読まない、全く読まないの4つから選んでもらった。一つでもよく読むと回答したものを読書量高群、よく読むが一つもなく、一つでも少し読むと回答したものを読書量中群、よく読む、少し読むとの回答がなかったものを読書量低群とした。

学年別に読書量について3群に分け(表2参照)、その比率の差について、カイ二乗検定を行ったところ、有意な差はなかった。

表2 学年別読書量

学年	読書量高群	読書量中群	読書量低群
1年 (n=123)	14	51	58
2年 (n=74)	10	31	33

### 3.1.4 絵本が好きかどうかについて

絵本がどれくらい好きかについて、非常に好き、少し好き、あまり好きではない、全く好きではないの4つから選んでもらった。無回答の者(1年生1人)を分析から除外した。学年別に絵本嗜好性について、4群に分けた(表3参照)。

あまり好きではないと全く好きではないの2つを、「好きではない」として、3群に分け、その比率の差について、カイ二乗検定を行ったところ、有意差はなかった。

表3 学年別絵本嗜好性

学年	非常に好き	少し好き	あまり好きではない	まったく好きではない
1年 (n=122)	33	79	9	1
2年 (n=74)	17	50	5	2

### 3.1.5 絵本を読む頻度について

絵本を読む頻度について、1週間のうち、何日絵本を読む機会がありますか?と質問し、記述してもらった。無回答の者(1年生1人、2年生1人)を分析から除外した。1回より多いと回答した者を頻度高群、1回と回答した者を頻度中群、1回未満と回答したものを頻度低群とした。

学年別に絵本を読む頻度について3群に分け(表4参照)、その比率の差について、カイ二乗検定を行ったところ、有意な差はなかった。

表4 学年別絵本を読む頻度

学年	頻度高群	頻度中群	頻度低群
1年 (n=122)	10	17	95
2年 (n=73)	5	13	55

### 3.1.6 絵本の蔵書数について

絵本の蔵書数について、あなたの自宅には、何冊くらい絵本がありますか？と質問し、記述してもらった。無回答の者、いっぱい、わからないとこたえた者(1年生2人、2年生1人)を分析から除外した。

10冊以上と回答した者を蔵書多群、1冊から9冊と回答した者を蔵書中群、0冊と回答したものを蔵書少群とした。

学年別に絵本の蔵書数について3群に分け(表5参照)、その比率の差について、カイ二乗検定を行ったところ、有意差があった( $\chi^2(2)=8.62, p<.05$ )。残差分析の結果、1年生に蔵書少群が有意に多く( $p<.05$ )、2年生に蔵書多群が有意に多かった( $p<.01$ )。

表5 学年別絵本蔵書数

学年	蔵書多群	蔵書中群	蔵書少群
1年 (n=121)	27▽	52	42▲
2年 (n=73)	29▲	30	14▽

▲は残差分析の結果、5%水準で有意に高い比率、▽は5%水準で有意に低い比率であったことを示す。

### 3.1.7 図書館の利用頻度による違い

図書館の利用頻度について、あなたは、図書館を一月に何日程度利用しますか？と質問し、記述してもらった。無回答の者(1年生1人、2年生1人)を分析から除外した。

1回より多いと回答した者を頻度多群、1回と回答した者を頻度中群、1回未満と回答したものを頻度低群とした。

学年別に図書館の利用頻度について3群に分け(表6参照)、その比率の差について、カイ二乗検定を行ったところ、有意差があった( $\chi^2(2)=8.94, p<.05$ )。残差分析の結果、1年生に頻度多群が有意に少なく、2年生に頻度多群が有意に多かった( $p<.01$ )。

表6 学年別絵本蔵書数

学年	頻度多群	頻度中群	頻度低群
1年 (n=122)	4▽	13	105
2年 (n=73)	11▲	7	55

▲は残差分析の結果、5%水準で有意に高い比率、▽は5%水準で有意に低い比率であったことを示す。

### 3.1.8 保育実践での絵本活用希望について

保育実践での絵本活用希望について、あなたは、保育実践で、絵本をどの程度読みたいと考えているかについて、とても読みたい、少し読みたい、あまり読みたいくない、全く読みたいくないの4つから選んでもらった。無回答の者（1年生1人）を分析から除外した。その結果を表7に示した。

あまり読みたいくないと全く読みたいくないの2つを、「読みたいくない」として、3群に分け、その比率の差について、カイ二乗検定を行ったところ、有意差はなかった。

表7 学年別絵本活用希望

学年	とても読みたい	少し読みたい	あまり読みたいくない	全く読みたいくない
1年 (n=122)	46	66	10	0
2年 (n=74)	33	37	3	1

### 3.1.9 学年による違いについての考察

上記の結果より、1年生に比べ2年生は、絵本のタイトルについての知識を持っており、絵本の蔵書数や図書館の利用頻度も多いことが明らかになった。養成校での学習のために絵本を購入することや図書館に行くことを通して、絵本の知識が増加した可能性が考えられる。また、絵本の知識が増加して、絵本の購入が増えたとも考えられる。

しかし、読書量、絵本が好きかどうか、絵本を読む頻度、保育実践で絵本を活用したいという希望については、学年間で有意差がなく、学生が積極的に絵本について知識を増やそうとしているわけではないとも考えられる。

また、絵本の著者に関する知識は、1年生と2年生で差がなかった。著者についての知識も増やすように保育者養成校では工夫する必要があると考えられる。

## 3.2 絵本知識得点と各項目との関係

### 3.2.1 読書量

読書量別の絵本タイトル知識得点、著者知識得点を表8に示す。群(3)を独立変数として、絵本タイトル知識の得点を従属変数とする1要因分散分析を行った結果、群の主効果が有意であった ( $F(2,194)=15.7, p<.001$ )。各群の絵本タイトル知識得点について Tukey の多重比較を行ったところ、読書量高群と読書量低群、読書量中群と読書量低群の間に有意な差が見られた一方で ( $p<.001$ )、読書量高群と読書中群の間には有意な差は見られなかった。

群(3)を独立変数として、著者名得点を従属変数とする1要因分散分析を行った結果、群の主効果が有意であった ( $F(2,194)=5.8479, p<.01$ )。各群の絵本タイトル知識得点について Tukey の多重比較を行ったところ、読書量高群と読書量低群、読書量中群と読書量低群の間に有意な差が見られた一方で (高群と低群  $p<.01$ 、中群と低群  $p<.05$ )、読書量高群と読書中群の間には有意な差は見られなかった。

表 8 読書量別得点

	タイトル 平均得点	タイトル 標準偏差	著者 平均得点	著者 標準偏差
多群 (n=24)	15.2	4.35	2.7	3.01
中群 (n=82)	13.4	4.28	2.0	2.24
少群 (n=91)	10.6	4.08	1.14	2.14

### 3.2.2 絵本が好きかどうかについて

読書量別の絵本タイトル知識得点、著者知識得点を表9に示す。群(3)を独立変数として、絵本タイトル知識の得点を従属変数とする1要因分散分析を行った結果、群の主効果が有意であった( $F(2,193)=5.9, p<.01$ )。各群の絵本タイトル知識得点についてTukeyの多重比較を行ったところ、絵本嗜好性高群と絵本嗜好性低群の間に有意な差が見られた一方で( $p<.01$ )、絵本嗜好性高群と絵本嗜好性中群、絵本嗜好性中群と絵本嗜好性低群の間には有意な差は見られなかった。

群(3)を独立変数として、著者名得点を従属変数とする1要因分散分析を行った結果、群の主効果が有意であった( $F(2,193)=4.4, p<.05$ )。各群の絵本タイトル知識得点についてTukeyの多重比較を行ったところ、絵本嗜好性高群と絵本嗜好性低群の間に有意な差が見られた一方で( $p<.05$ )、絵本嗜好性高群と絵本嗜好性中群、絵本嗜好性中群と絵本嗜好性低群の間には有意な差は見られなかった。

表 9 絵本嗜好性別得点

	タイトル 平均得点	タイトル 標準偏差	著者 平均得点	著者 標準偏差
高群 (n=50)	13.8	4.88	2.3	2.67
中群 (n=129)	12.1	4.19	1.6	2.31
低群 (n=17)	9.7	4.40	0.4	0.41

### 3.2.3 絵本を読む頻度について

絵本を読む頻度別の絵本タイトル知識得点、著者知識得点を表10に示す。群(3)を独立変数として、絵本タイトル知識の得点を従属変数とする1要因分散分析を行った結果、群の主効果が有意であった( $F(2,192)=9.3, p<.001$ )。各群の絵本タイトル知識得点についてTukeyの多重比較を行ったところ、頻度中群と頻度低群の間に有意な差が見られた一方で( $p<.001$ )、頻度高群と頻度中群、頻度中群と頻度低群の間には有意な差は見られなかった。

群(3)を独立変数として、著者名得点を従属変数とする1要因分散分析を行った結果、群の主効果が有意であった( $F(2,193)=4.4, p<.05$ )。各群の絵本タイトル知識得点についてTukeyの多重比較を行ったところ、頻度中群と頻度低群の間に有意な差が見られた一方で( $p<.05$ )、頻度高群と頻度中群の間、頻度高群と頻度低群の間には有意な差は見られなかった。

表10 絵本を読む頻度別得点

	タイトル 平均得点	タイトル 標準偏差	著者 平均得点	著者 標準偏差
高群 (n=15)	13.1	4.03	1.8	2.24
中群 (n=30)	15.1	5.64	2.7	2.89
低群 (n=150)	11.7	4.04	1.4	2.21

### 3.2.4 絵本の蔵書数について

絵本蔵書量別の絵本タイトル知識得点、著者知識得点を表11に示す。群(3)を独立変数として、絵本タイトル知識の得点を従属変数とする1要因分散分析を行った結果、群の主効果が有意であった( $F(2,191)=9.9, p<.001$ )。各群の絵本タイトル知識得点についてTukeyの多重比較を行ったところ、蔵書多群と蔵書中群の間( $p<.01$ )、蔵書多群と蔵書少群の間( $p<.001$ )に有意な差が見られた一方で、蔵書中群と蔵書低群の間には有意な差は見られなかった。

群(3)を独立変数として、著者名得点を従属変数とする1要因分散分析を行った結果、群の主効果は有意ではなかった。

表11 絵本蔵書数別得点

	タイトル 平均得点	タイトル 標準偏差	著者 平均得点	著者 標準偏差
多群 (n=56)	14.5	4.80	2.2	2.50
中群 (n=82)	11.0	4.14	2.6	2.49
少群 (n=56)	11.1	3.98	1.8	1.78

### 3.2.5 図書館の利用頻度による違い

図書館利用頻度別の絵本タイトル知識得点、著者知識得点を表12に示す。群(3)を独立変数として、絵本タイトル知識の得点を従属変数とする1要因分散分析を行った結果、群の主効果が有意であった( $F(2,192)=6.4, p<.01$ )。各群の絵本タイトル知識得点についてTukeyの多重比較を行ったところ、頻度多群と頻度少群の間( $p<.01$ )、頻度中群と頻度少群の間( $p<.05$ )に有意な差が見られた一方で、頻度多群と頻度中群の間には有意な差は見られなかった。

群(3)を独立変数として、著者名得点を従属変数とする1要因分散分析を行った結果、群の主効果は有意ではなかった。

表12 図書館利用頻度別得点

	タイトル 平均得点	タイトル 標準偏差	著者 平均得点	著者 標準偏差
多群 (n=15)	15.3	6.22	2.3	2.82
中群 (n=20)	14.2	4.65	2.5	2.59
少群 (n=160)	11.8	4.11	1.5	2.27

### 3.2.6 保育実践での絵本活用希望について

絵本を読む頻度別の絵本タイトル知識得点、著者知識得点を表13に示す。群(3)を独立変数として、絵本タイトル知識の得点を従属変数とする1要因分散分析を行った結果、群の主効果が有意であった( $F(2,193)=9.4, p<.001$ )。各群の絵本タイトル知識得点についてTukeyの多重比較を行ったところ、希望高群と希望中群の間( $p<.001$ )、希望高群と希望低群の間( $p<.01$ )の間に有意な差が見られた一方で、希望中群と希望低群の間には有意な差は見られなかった。

群(3)を独立変数として、著者名得点を従属変数とする1要因分散分析を行った結果、群の主効果が有意であった( $F(2,193)=4.2, p<.05$ )。各群の絵本タイトル知識得点についてTukeyの多重比較を行ったところ、希望高群と希望中群の間に有意な差が見られた一方で( $p<.05$ )、希望高群と希望低群、希望中群と希望低群の間には有意な差は見られなかった。

表13 絵本活用希望別得点

	タイトル 平均得点	タイトル 標準偏差	著者 平均得点	著者 標準偏差
高群 (n=79)	13.9	4.36	2.2	2.53
中群 (n=103)	11.4	4.42	1.4	2.22
低群 (n=14)	10.1	3.25	0.8	1.67

### 3.2.7 絵本知識得点と各項目との関係についての考察

タイトル得点について、読書量、絵本が好きかどうか、絵本蔵書数、図書館利用頻度、保育実践での絵本活用希望について、高い方が平均得点は高かった。しかし、絵本を読む頻度については、多い群よりも中程度の群の方が平均得点は高かった。

著者得点について、読書量、絵本が好きかどうか、保育実践での絵本活用希望について高い方が平均得点が高かった。絵本蔵書数、絵本を読む頻度、図書館利用頻度が多い群よりも中程度の群の方が平均得点は高かったが、絵本蔵書数、図書館利用頻度については、統計上有意な差はない。

これらの結果より、保育者養成校に通う学生が絵本のタイトルや著者についての知識を増やすには、学生自身が絵本を読む頻度を増やすことよりも、保育実践で絵本の活用をする意識をもち、読書量を増やすことが有効であると考えられる。

## 総合考察

保育者養成校に通う学生の絵本知識量について、検討した結果、学年が進むにつれて、絵本のタイトルについての知識は増えるが、著者名についての知識は増えないことが明らかになった。これは、タイトルリストについて、養育者と保育者養成校の学生の間には差がなく、大学生よりも高い得点を示し、著者リストについては、養育者、保育者養成校の学生、大学生の順に高い得点を示したことより、養成校での学習でタイトルについての知識は増えるが、著者名についての知識は増えていないという大竹ら(2019)の結果と合致している。

今後、保育者養成校での学習で、より絵本についての知識を増やす方法について検討していく必要がある。

## 謝辞

本調査にご協力いただきました保育者養成校の学生に感謝致します。また、リサーチアシスタントとして質問紙入力を行いました琉球大学教育学部4年次の大城空さんにも感謝いたします。

## 引用文献

- 藤田久美子(2021) 幼児教育における劇づくりの意義：保育内容(人間関係)の観点から：幼稚園5歳児クラスの劇「あほう村の九助」より 明星大学教職センター年報 4 52-61
- 北川節子(2022) 絵本を活用した乳幼児の健康・安全指導—健康・安全に関する絵本の概要と歯の健康指導— 北陸学院大学・保育陸学院大学短期大学部研究紀要 15 169-182
- 文部科学省(2018) 幼稚園教育要領解説 フレーベル館
- 大竹裕香・奥村優子・山田祐樹・小林哲生(2019) 日本における絵本知識測定リストの作成 認知科学 26(2) 243-253
- 齋藤めぐみ(2022) 幼児を対象とした絵本活用による健康教育の検討 むし歯・排便に関連する絵本の内容分析 千葉敬愛短期大学紀要 44 33-41
- 綿引喜恵子・小口恵巳子(2020) 幼児の読解力と創造的表現行動との関係に関する一考察—5歳児の絵本および物語の読み聞かせより展開した主体的遊びとしての「劇ごっこ」から— 茨城女子短期大学紀要 47 118-191
- 矢幅照幸・石井由依・若槻稜磨・近藤雄大・崎田嘉寛(2021) 絵本を用いた運動遊びの実践研究—保育内容「健康」・言葉に関する教材開発を視点として— 北海道科学大学研究紀要 49 1-8